

徳島県支部

伝統的工芸品に指定された大谷焼産地の活性化に関する調査研究

1. 大谷焼産地の歴史と背景

大谷焼は、江戸時代に他国の陶芸職人が大谷村（鳴門市大麻町大谷）に立ち寄ったことを契機に、村民の出資で窯が築かれたことが始まりとされる。近代に入ってから、徳島特産の阿波藍の隆盛とともに大甕の需要が増え、製作技術が発展していった。そうした大物陶器づくりは二人一組となり、地面に寝ころんでろくろを足で蹴って回転させ、もうひとり成形しながら少しずつ積み上げていく「寝ろくろ」の手法を用いる。また、陶器を焼く登り窯の大きさは日本一とも言われ、焼き締めによる土色の素朴な味わいが特徴である。平成15年9月には、経済産業大臣指定の「伝統的工芸品」に指定された。付近には四国霊場一番札所などの観光資源が点在する。

2. 現状の課題

事業所訪問による聞き取りや大谷焼窯まつりに訪れた生活者アンケート調査を通じて、強み、弱み等を抽出した。その結果は、小規模産地ならではの良さ、大甕や睡蓮鉢などの独自性を持つ商品や周辺の地域資源に独自性があるものの、個々の事業所は作家志向であり、経営管理、顧客管理が行われていない。また、産地としての情報発信力や企画力に欠けるため、産地ブランドを形成するには至っていない。このままでは、高齢化による廃業などで産地活力が衰退する恐れがある。

3. 産地振興の実施プロジェクト

産地の活性化には、経営ビジョンの明確化と経営マインドの強化が不可欠である。未来について「こうありたい」という姿を明らかにするとともに、産地がその課題を共有し、産地の事業所の一人ひとりがそこに至る道筋（行動計画）をともに考えて実践することが重要と考える。目標を掲げプロセスを大切にしながら産地の一人ひとりの行動意識を高めていただくために、具体化したイメージとして8つの「大谷焼の里づくりプロジェクト」を提案した。

それは、「イメージづくりプロジェクト」「工房販売促進」「作家の顔が見える」「大谷焼をもっと楽しくする」「窯まつり」「フォトコンテスト」「アーティスト招へい」「登り窯復活」の各プロジェクトである。各窯元がときにリーダーとなり、ときに協力しあいながら楽しんで取り組むことで、変化が起こるのではないかと期待している。